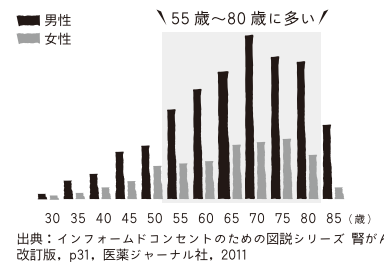


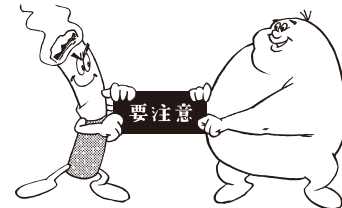
### 「腎がん」って、どんな病気？

#### 50代からかかる人が増加



患者数は年々増加。50代から増え、60~70代でもっとも多くなります。男性：女性の比率は約2:1とされています。

#### たばこと肥満には要注意



腎がんのリスク要因にはまだ不明な部分が多いものの、明らかになっているものとしては、喫煙と肥満が挙げられます。

#### 早期には症状はほとんどない



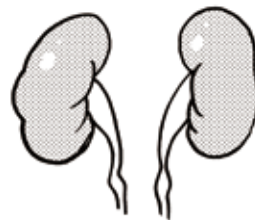
血尿や腹部のしこり、わき腹の痛みが特徴的な症状と言われていましたが、これらの症状が出る頃には病期がかなり進行していると考えられます。

#### 画像診断で偶然見つかることが多い



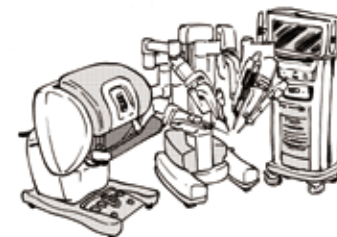
ほかの病気の精密検査や人間ドックなどで画像診断を受けた際に偶然に発見されるケースが多く、その場合には比較的早期の状態で見つかります。

#### 腎臓は2つある



残る方の腎機能が正常であれば、手術で片方の腎臓を摘出しても、その後の生活に支障はほとんどありません。

#### 早期のがんはロボット手術で



小さいがんなら、手術支援ロボット「ダヴィンチ」を使って、腎臓の一部だけを切除する手術が保険で行えるようになっています。

## 新たな治療法や薬も幅が広がってきた「腎がん」の治療

胃がんや大腸がんなどの5大がんと比べれば少ないものの、患者数が年々増え続けている腎がん。その治療法について、泌尿器科の先生に聞きました。



定期的な人間ドックなどの検査を受診しましょう

泌尿器科 山本新吾 主任教授

治療の選択肢が増える中、新しい治療法も導入しています

腎がんは、進行すると血尿や腹部のしこり、腰背部の痛みなどの症状が見られることもありますが、早期にはほとんど症状がありません。最近では、来院される方は、人間ドックやほかの病気の精密検査の際に、CTや腹部超音波検査といった画像診断で偶然に見つかったというケースが多くなっています。

治療の第一選択は手術です。がんがある方の腎臓をすべて取り除く腹腔鏡下根治的腎摘除のほか、がんが4cm未満の小さなもので腎臓にとどまっている場合は、腫瘍がある部分だけを取り除く腎部分切除を行います。難易度の高い腎部分切除は、手術支援ロボット「ダヴィンチ」によるロボット支援下腹腔鏡下手術が保険適用となっており、従来の腹腔鏡手術よりも、腎への血流を止めて手術をする時間がより短くて済むため、患者さんの体への負担をより軽減できるようになりました。

腎がんの治療は腎摘除術または腎部分切除術などの手術が基本ですが、残る方の腎臓の機能が悪い場合や患者さんの体力などから腎摘除術が難しいと考えられるときには、放射線科に依頼して腫瘍にラジオ波電流を流して破壊するラジオ波焼灼療法を行うこともあります。他科と連携のうえ最良の治療オプションを選択していきける点は、兵庫医科大学の特徴と言えます。

転移が複数ある、手術ができない場所があるといった場合には、薬物治療が主になります。近年は分子標的薬を使用するのが一般的ですが、昨年にはニボルマブ（オプジーボ）という免疫チェックポイント阻害剤も転移性腎がんや切除不能な腎がんでも保険適用となり、薬物治療においても選択肢はますます増えてきています。

このように多くの治療選択肢がありますので、患者さんにとって何が最良の選択肢なのかは、年齢や体調、その方の置かれている社会的状況などによって変わることもあります。もし自分だったら、自分の家族だったらと、常に患者さんの立場に立って、オーダーメイドな医療のあり方を丁寧に探っていきたいと考えています。

血液をろ過して尿を作るだけでなく、血圧を調節したり、赤血球をつくるホルモンを分泌するなど、さまざまな働きをしている腎臓。その尿を作る尿細管という部分から発生するがんは、腎がんと呼ばれています。